

序にかえて : かけがえのないいのち

雑誌名	真実心
号	36
ページ	1-9
発行年	2015-03-10
URL	http://id.nii.ac.jp/1108/00000542/

序に代えて

——かけがえのないいのち——

一 郷正道

国内・外で筆舌に尽くし難い悲惨な殺人事件が連続する中、この「まえがき」の執筆に苦斗しています。想像を絶することが日常化しつつある昨今では、陳腐な表現でしかなくなってしまうとはいえ、やはり、今、かけがえのないいのちの重みを、一人ひとりが深く心に刻むことが大事なことでないでしょうか。

「私のいのち」などと、本来、私物化してはいけないはずのいのちの本質に目を向けねばなりません。誕生から死に至るまで何一つ自己責任で全うすることができないのが、この私のいのちではないでしょうか。

この「私」という人間は、両親がおったればこそ賜ったいのちであった。その前はお祖父ちゃん、お祖母ちゃんがおられた。それから私自身は見たことも口を利いたこともない

けれども、曾祖父さん、曾祖母さんがおられなかったら今の私はあり得ない……というように辿ってゆきますと、「私のいのち」と言うけれども、この私のいのちのルーツは無限の過去に遡ってゆきます。そういう深い長い歴史があつて、しかもその間に一つも欠けることがなかったればこそ、初めて今の私たち、お互いがあるのではないかということを思わざるを得ません。しかも私には子どもがいる、孫がいるということですから、「私のいのち」というけれども、その「いのち」は、過去、現在、未来にわたつて、不連続の連続という形で継承されてきていると言えましょう。ところが、私たちは、この世の中に存在する六十年乃至八十年、それだけをもつて「私のいのち」と考え勝ちですが、どうもそういう考え方を改めなければならぬでしょう。「いのち」は、決してこの世だけ、この世に存在した時だけのものではないと思います。

これは言わば縦の軸ですが、横の軸で考えても同じことがいえます。私には兄弟がいる、親類の方々がいる、町内の人々との繋がり、あるいは、大学へ来れば友達や先輩、職員の方々との繋がり、あるいは、家で飼っているペットとの関係、あるいはご商売の方ならお客様との繋がり、関り合い、さらに範囲を拡げていけば、自然環境と私との関わり合い、等々、無限に広がっていきます。

序に代えて

私を取り巻く時間的・空間的に総てのもの、それは目に見えるもののみならず目に見えないものを含めて、そういう総てのものとの関係性の中にしか、私のいのち、存在はあり得ないということです。

総てのものとの関係性の中にしか存在し得ない私たちであってみれば、私たちは始めから束縛された不自由な存在であるわけです。その意味でも、私のいのちとはいえ私の思い通りになるものではないものです。思い通りにならなくてあたりまえなのです。

そんなことを思いつつ、私の「いのち」は何なのかと考えれば、まず、それは「賜りもの」ではない、与えられているものである、という理解が生まれると思うのです。そうであればこそ、私のいのちも他人のいのちも大事にせねばならないのです。

多分皆さん方もそうであろうかと思うのですが、そのようなことを思う時にすぐ思い浮かぶのが親鸞聖人のお言葉、『歎異抄』の第五条の一節です。

一切の有情はみなもつて世々生々の父母・兄弟なり。

ここで大事なのは「有情」という言葉です。「生きとし生けるもの」という意味ですが、

仏教で「生きとし生けるもの」という時には人間だけではありません。いのちあるものはみんな同じ価値を持った存在だと理解しますから、動物のいのちも植物のいのちも一切を含めて仏教では「有情」あるいは「衆生」という言葉が使われているということに注意すべきだと思います。

そうすると、一切の生きとし生けるものは、「みなもって世々生々」ですから、生まれ変わりに死に変わりしてゆく、そのいのちの歴史の中にあつては総て「父母・兄弟」の関係だということです。

これは少し突飛な発想との印象を持ちます。しかし現代人でも生物学の世界、遺伝子の世界はそれを証明してしまいました。今の学会では、人類の先祖はチンパンジーが一番近くて、その次がゴリラだといわれています。その進化の流れの中において我々ヒトというものが枝分かれして誕生したと言われているわけで、そうすると親鸞聖人の仰ることは間違っていないというのを思うのです。

そして、この親鸞聖人のこういうお考えは、日本の親鸞聖人一人の独自のものであるかと言うと、そうではありません。インドの仏典にも同じような考え方が書かれてあるので、

あらゆる有情は輪廻のなかにおいてたがいの親族であった

（取意／相応部經典Ⅱ、189頁）

またインドのすぐれた学者であられた無着むぢゆく（アサンガ／三一〇～三九〇頃）という方がやはりこう仰っています。

一切の有情は無始よりこのかた生死を遍歴し長時にわたり流転するとき、互いに父、母、兄弟、姉妹、師、高貴で権勢の人に、ならないことはない。かかる因縁によつて、一切の敵はみなわが友人でないことはない。

（取意／『瑜伽師地論』聲聞地／『大正新脩大藏經』30、453頁下）

このように喝破していらっしゃるのです。

これはまさに現代の歴史がそれを証明しています。ご存じのように、民族紛争も絡んでイスラム教とキリスト教、さらには宗派間のいわゆる宗教戦争は非常に深刻です。しかし、源をたどればユダヤ教でしょう。ユダヤ教からキリスト教が出てきて、その後にはイス

序に代えて

ラム教が出てきたわけでしょう。復讐の応酬が繰り返されて非常に惨い戦争をしているイラム教徒、あるいはキリスト教徒も、同じユダヤ教が源なのです。であるならば「一切の敵はみなわが友人でないことはない」とインドの仏教学者が仰った言葉がそのまま当てはまると思わざるを得ないわけです。自分の血縁にならなかつた有情は誰もいない、という人間観に立てば親鸞聖人が同じ『歎異抄』第五条に、

親鸞は、父母の孝養のためとて、一返にても念仏申したることいまだ候はず。

と仰っている理由が解ります。

親鸞聖人にとっては自らの父母だけがその存在をあらしめるのではなく、考えれば考えるほど無限の他のものとの繋がり、関わりの中にしか「親鸞」という人も存在しなかつたわけですから、だから単に自分の親だけの供養のためにだけ念仏を申すべきものではないのだ、というご理解になってくるのだろうと思います。

そこには、有情すべてに対する深いまなざし、慈悲の心をうかがい知ることができましよう。その心は、苦の中にいる全世界の有情に向けて、あらゆる差別をこえてこそ注がれ

序に代えて

るべきものでしょう。

そのような親鸞聖人と同じ心ばせを持っていたインドのすぐれた学者であるカマラシーラ（蓮華戒、八世紀）の発言を最後に紹介しておきます。

それゆえ、このように全世界のものたち (*being*) が苦の火焰になめつくされていると知り、自分にとって苦が不快である如く他の人たちにとっても「苦は」不快であると考えらることで、その有情すべてに対する慈愛 (*kṛpā*) を習得すべきである。

まずはじめに、仲間たち (*mitrapakṣa*) が先述の種々の苦を嘗めていると思いたいすことで、「かれらに対する慈愛を」習得すべきである。

次に有情の平等性に基づき「有情の」差異を見ることなく、また無始以来の輪廻において百回「しか」自分の血縁にならなかつた有情は誰もいないと熟考することで、多くの人に対する「慈愛を」修習すべきである。

仲間たちと同様に多くの人に向けても、等しい慈愛が行使されているとき、そのときは、敵対者に対しても、全く同様に、有情の平等性などに思いをはせることで (*manasikāra*) 「敵対者に対する慈愛を」修習すべきである。その「敵対者」に対して

も仲間「たちに向けてと」同様に、「慈愛が」等しく行使されるとき、そのときには順次、十方すべての有情たちに対しても「慈愛を」修習することになるはずである。

また苦しんでいるただ一人の愛おしい童子に対するのと同様に、すべての有情に対しても苦を除去してやりたいという形をとる、ひとりでおこつてくる(svarasavahini)慈愛が、等しく行使されるとき、そのときには、それ(慈愛)は完成しており、そして「それが」大慈愛 [mahakarunā] という名称を得る。

〔修習次第〕初編 pp.189,20-190より)

さきほど(3頁一行目)「目に見えるもののみならず目に見えないものを含めて」総てのものとの関係性の中にしか、私のいのちはあり得ない旨述べましたが、その中の「目に見えないもの」について一言付言したいと思います。

青いお空の底ふかく、海の小石のそのやうに、夜がくるまで沈んでる、

晝のお星は目にみえぬ。見えぬけれどもあるんだよ。見えぬものでもあるんだよ。

(金子みすず「星とたんぼぼ」より)

序に代えて

みなさん一人ひとりのいのちを、楽しい時も苦しい時も、生かそう生かそうと働いてい
てくれる、眼にはみえない、無限の偉大な働きがあることに目覚めてください。そのよう
な働きによって生かされている自分に気づくとき、謙虚な気持ちで身を正さざるを得ず、
喜びと感謝に満ち、思いやりの心で他のために献身的に働ける人間になるでしょう。

この「眼に見えぬ」最たる働きが、私にとっては仏様だと思つてます。

——二〇一五年二月——